善光寺道名所圖會

三

和書門
類 二七四六七號
八九函
一〇架
五冊

内閣文庫
和書
類 二七四六七號
五冊
二七四函
一九架

内閣文庫
番號 和 27467
冊數 5 (3)
函號 174 218

町奴所持

国立公文書館
National Archives of Japan

善光寺道名所圖會卷之三

目録

善光寺驛　北國街道　美和神社　時丸の塚
如來堂　三門　二王門　御供所
年神宮　昆沙門堂　四宜樓　寛慶寺
定念佛　高雄塚　鐘樓　骨堂
經藏　辨財天　秋葉宮　兄弟塚
山王塚　諸神塚　萬善堂　別當大勸進
大本願　六地藏　大佛　寺中四十六坊
阿闍梨池　牛頭天王　御霧屋　攝待所
社家　制札　番所　大門町
朝日山　大岑山　熊野社　諏訪社
閻浮檀金　本尊如來出現　月蓋長者說　百濟王說

本朝來現　聖德太子說　難波掘江
伊奈郡寺建立　檀越略系　光明常燈
戒檀廻　法然上人舊跡　堂内年賀式
善光寺四號　鏡の御影　親鸞聖人旧蹟
元録造營録　善光寺紀行　年中行事
蛯〜んど藥師　山吹の瀬　苅萱堂
同七槁　同七清水　長原温泉
栗田刑部城趾　横山信濃城跡　同七井
飯縄里宮　御供所　塩沢温泉
駒返し　千日屋舗跡　仁科氏宅
天狗の遊所　飯縄原　篭屋
飯砂　剱ヶ岑

善光寺内

登り丹波嶌（一里あり越後の方へくるゝ善光寺より荒町へ一里半）礼（三里半柏原（一里野尻（一里越後の関川（一里半足上の順路七里ゆき野尻小湖水より其流も越後の今町の浜ゆて海へ入る此川を関川といふ野尻の湖水も流方と同じく水をつめる其上を人馬も往来せり但諏訪と八裏りて巖室の物八見荒く浪立る水徒ゆ夜早春に成りて始て凍る湖中に岩ゆり辯財天を安ぞ

按るに年礼より柏原野尻越後の関川二朕関山二本木荒井を中山八宿といふ又善光寺八北國街道の宿驛ゆして本名八水内郡柳原庄芋井郷長野村なり如来此所小迁座の後地名もゆゑ

踏ゆて惣名善光寺と称する成べし

善光寺より東（伊勢町新町淀ヶ橋と渡り横山村の次三輪村の南脇ゆ美和神社（神名記に美和神社水内郡小八座の一也）社家八高萩伊豫ちとゆ（三輪村八北國街道の順路）て善光寺より十五丁ゆ三輪村の北脇小時九の塚とて古墳あり（善光寺七塚の其一）

三輪村
美和神社
神名帳
水内郡小八座
の甚一なり

○定額山善光寺　水内郡栫原の庄芋井郷長野村の霊場なり

天智天皇三年甲子草創也むかしは天台宗にて三井寺持なり其後真言宗と成て高野山に属しまた寛永年中東叡山に属して再び天台宗に帰依

本堂南向高サ十丈二重屋根撞木造柱の数百三十六本畝木の数法華経七文字の数法華経文字の数六万九千三百八十四字に准ずる四方に上下段有り正面の板舗小大なる香基と置く香爐の右脇に太鼓あり左脇に花瓶あり

松を入る足と親鸞聖人手生の松とて毎月朔日に挿代ゆるなり

本尊閻浮檀金阿弥陀如来も本堂西屏の間に安置に御厨司四方に

戸帳あり應安二年申三月三日と記す其外を綾錦金襴等

ふく七重に包むと雖も秘佛にして毎朝の開扉とて戸帳扉一重

開くのみなり中の間より東へかたむく善光善祐彌生の前を安置

にしたゝび善光を中央に置く事故ある事なり

塩尻

善光寺本尊ハ一光三軀ゝ是を新ふ摸鑄しるゝ尾張國熱田乃
僧定尊法師霊夢によつて建久六年五月十五日中尊ハ
鑄成し同く六月二十八日ふ二菩薩を鑄をるとなんちとこ尊
別軀れゝ光ゝ又画像ハ伊豆國走湯山の僧淨蓮上人兼久
三年の春告によつゝ御戸と開き尊像を拝しゝ自図像せり
同年五月佛工越前の法橋海縄鑄鎔して摸をしやゝ
按ふ定尊法師ゝ九歳の時法華を誦ゝ夫より三十二年ハ間法
華を誦ゝて九四万八千九百部と云ゝ其後又法華一字毎
に拝し弥陀乃名号一遍つ唱ゝ一千部ふ満ム實に建久ゝ年
四月六日其功畢ヲし其年ハ十一月六日善光寺如来の告を感得
し六万九千人の慈施を勧縁して金銅乃ゝ像を接鑄と云ゝ
抑善光寺ハ本尊を生身の阿弥陀如来と称ゝる所以を閲侍るり
其むゝ中天竺ゝ大聖釈迦牟尼佛長者月益乃慳貪なる代

定額山善光寺
寺中之圖
其一

大峯山
妙天
八幡
経蔵
三門
別當大勧進
一万菩提堂
手水
大仏
大ビンズル
福生院
吉祥院
教授院
常智院
蓮花院
世尊院
二王門
地蔵
釈迦堂
常住院
威徳院
四菓院
玉照院
スハ
センドウ堂
ヨシマ堂
正信坊
神頭坊
古照坊
正定坊
白蓮坊
正智坊
兄部坊
蓮池坊
隨行坊
吉行坊
玄照坊
拾多坊
常行坊
德行坊
甚妙坊
野村坊
鏡善坊
向佛坊
行連坊

本堂
コツ堂
年神宮
洪所
諸神ツカ
山王ツカ
鐘楼
時ノ鐘
塔ノ跡
寛慶寺
高雄ツカ
定念佛
宝林院
其二
みな
河中
うつむ
移ゝ月乃
あたゝ
清光
月の鏡
人ゝ
ゝさせは

不便ふ思召し方便を以て西方の聖主阿弥陀如来を影向ゐさしめ其誓願を説き其奇瑞を示現し長者が家愛れ娘をたゞえ五百人の眷属より國中の諸民れ難病苦すを平愈なさしめ給ひしうた月蓋長者夢の覺るる如く殆随喜の涙にむせび信仰の思ひ肝ふ銘じ忽ち内外清浄の本心ふ立帰て釈尊の御許ふ参りゆきゆき薫くい今れ三尊の御形を模し奉て我室内に安置し甚重れ芳恩を報じ奉らん然ども吾凡夫の力ふ争うるひ奉らむ我が志願を哀愍し給へとゆり仏長者に告給ひく善哉く往勝甚しきゆゑ商浮檀金を以て鋳模し真躰を此土ふ止めたまへしそも此金い尋常れ金ゆゑ波龍宮にある所ふ然ば神通力を羅漢ゆゑで い弟ゆ求ることを得ん目連を以て其使ふ臣遣文埱ふ求めたまへしと宣へり一舎の大所是を聞く彼竜宮城とゆい其行程八万由旬の境へ其上漫く生る沙諸の底波浪烈く假令神通第一なり

目連尊者
以神通到
竜宮城得
閻浮檀金

国立公文書館
National Archives of Japan

ともに手を至るべくなんやと問ふに汝そ同連尊者は冗舎は牧念と悟て進出て
曰吾昔時佛の音聲は遠く他方に響き給ふまてと計知らんが為に
遥の仏土を飛越て光明盤世界に到ぬ是とりてえらるゝ何ぞ竜宮
城ふるまつてんやと易は事みてあるとて拒るは勅意を兼て其僧
立く左の足ゆく大林精舎の北乃榜を踏のまつと見るべ右の足いえを龍
宮城ふ飛行ゆくり一會の大衆肝を消し魂感ぞるとり外ぎるれかゝ目
連尊者竜宮城ふ到て其形勢を見るに四面ふ築地あり銀の門を連
内ふ数多は小塔その威をあらゝく守護し半り外乃陣よい
四方に四節は景氣と作て玉の甍金は拄瑠璃乃扉水晶の壁に玉
の簾をうけ緑竹青綱悠〳〵と蘭蕙乃薫て紛〳〵り門を守護を
れ眷属に手長足長とゝふ者ありて其力金剛力士の如く厳〳〵衛
てゝるをば容易入ゝるひやゝとゝれば同連神通をもつゝ虚空とゝの
入なんやと思て所に内より赤衣の官人出ゝ是ゝを竜宮城なゝ法身乃

如きゝ人倫の境界ふあゝ涙早く本土に帰て去のへとゝふ其ゝ紀同
連尊者佛勅は趣とのべゆへを彼者聞く扨を世尊の御使者なぞ
やとゝゝべ上人言上ゝとゝを有度ゝとて急ぎ内に入ゝ伴の旨
を上奏ゝを行ぞ龍王聞ゝゆひ左あゝに是へて南殿ふ請じ
く様ゝの供養と演べ其後龍王出會ゝ尊者に對面あゝを
同座併勅と伸て曰西方極樂世界より化現来臨乃如来ふ御
形を摸ゝ奉て末代の衆生を利益せん事と願ふまゝるに縛
幕ゝ奉るに龍宮城の珍寶閻浮檀金ふ拐る金ゝ望ゆふ
ゝゝ為是形ゝ孫ゝを此金を佛ふ造ゆへゝ其旨を
ぜ伸給ひゝ教竜王ゝ問ゝゆへを此金ゝ十ふ深ゝ
山土に埋ひゝ茅一の重寶なりゝ此土ふを田畠を耕を事
るけ也ば米穀あるゆ形ゝ園ふ桑ゝを見ば絹布の類ひを織ゝを
業代ゝゝに唯安樂に渡ゝゆへゝ此金の徳ふゝ衣食に

社に詣で足く足し給ふ事なれば佛の財金と成るも送り
奉るまことにあるべきことを叶ひ申すと宣へども因連閻浮
提吾佛前におひて勅を受殊に大衆の中より氏使者に撰を
なすべしと帰らん事本意なる業なり神力を現じ
奪ひ取らんと云ふ中にざかりと思ひ給ふ解脱容
易なるこそあるべしと何なる拙者に言はせ給ふ釈迦佛乃
因位の昔なりと我語り給ひける中略龍王是を聞く城の理に伏
し給ふ氣色ゆく斯ゆく尊者怒りの色を仰に随ひ
此紫金を捧申さんと云ふ容易く来せんも尋常の粧
奥に如くや思ひ給ふ竜宮第一の重宝なるよと演く寄
異の響に預らん為かくい申せ氏所に此金を出べいで仏勅を
蒙らん左なくば尊者の来給もるべ旦ら仏勅旦に仏号に資料
なり事なり申さんと其侍座を起宝塔の扉を開き閻浮

檀金三千七百両を手自取出く恭く捧奉る因連紫金を受
取此功徳廣大なるよ讃歎して刹那に毘舎離國に飯て閻浮檀金
を世尊に奉りのひる世尊歓喜し給へ月蓋長者も悦び限なく
かくて彼金を玉の鉢に盛て臺上に備置彼三尊を請し奉るべ三尊
忽光明を放ちて照らしのへば又釈尊光明を放ち二号に光明ゆく
閻浮檀金と照らしのへば不思議なる氏金忽やつるぎ沸きぐく
成れきつ干時釈迦牟尼仏三昧禅定に入らせ給ひ浄身に積歩
給へる功徳古度十婆羅密十力四無所畏三十二相八十種好内外
一切乃功徳を現じのへる然ば禅定より出させ給ひ食に向く
印し給へる忽三尊の聖容に違ひて金色乃佛體と変じのへ
ば有難き良あり本佛歩より給ひ新仏の頂を三度撫た
ゆへ新仏又三度禮し給ひ二仏同く虚空に飛上り住ス
るに其高さ七多羅樹の如し倶に光明を放ち神変不測な

粧ひを現じ西方に飛行ひ月蓋遥に拜し奉り乞とたろ
に中るに新佛を儲け奉ふい南閻浮提の本尊とな〜まり来永
劫の衆生に至る迄利益を蒙らしめんが為に爭我願を空〜く本土に
も歸りぬそと歎き悲〜るをば虛空よりあ〜くるに寿とな〜て汝
暫く待べし本仏を送り奉るべし必帰来るべと告させのひしやがて飛
飛らせ給ひ西乃樓門の上に立ぎまうるべき長者歡喜あさうべ
如来を請じ入奉り金銀七寶を鑄そ〜法大伽藍を建
立〜五百人の比丘を扶持〜六八弘誓の願力をあつぎ不斷礼
拜をなさせり是併大聖釈尊乃厚恩なりかあ〜ぎいなでうかほ
奇特の有りし長者を初其外乃眷属總〜毘舍離國の万民ともを
〜大林精舍に詣で〜菩提の道に赴入ふきる我朝に出現〜
給ひ善光寺如来と申さ此御佛乃濟事形を

正身如来重サ六貫三百目　前立二尊一佛重サ八百七十目宛

斯く月蓋長者を同名同姓みて七代迄跡を續五百歳の間
榮華に榮へ樂りり其後乃願ふを一天萬乗の国王と成く世に恐る
者なく如来を安置〜まり隨値供給〜奉らんと願〜ひば甚深の生
ふ於ては百濟國聖明王便月蓋長者の再誕く是偏に如来不可思議
乃佛力ぞ〜本尊天竺國ふまうて衆生を利益〜給ふ其年月五
百年の間りり夫より百濟國ふ飛行ひ入り是即月蓋長者今を彼
國乃大王と生まれ所以りり如来八百濟國の禁闕ふ望〜空中に
住〜〜く光明を放ち給へば玉殿庭上耀きうろく見くりり諸〜の
臣下上下の官人ともいろと怪〜めば天子を此を〜御覧じく
驚き給ふ車限乃形〜如来光明の内より顕そるひあ〜〜るに辭
〜て告給ふるを驚き吾いまを四十八願の主西方極樂乃教主
なり左右の侍者ハ救世乃大悲衆生護念の菩薩なり抑聖明王の前
身むし天竺ふ在く月蓋長者なり〜時無二乃信心をもち我

如来
百濟國乃
禁闕ゝ出現して
聖明王の前身
と示したまふ図

春江補畫

極樂淨土より吾を請ずるなり切なるかよりて吾又應化して長者并
に眷屬と初其外群生と濟度せんと是偏に我本願不取正覺乃誓ひ
ゆへなり此功德に依て長者が願望れ如く帝位に備りるなりも十
善の榮華に誇て邪無常と忘れ三寶に歸する志を失ひたる愛
欲惡果れ業とかれ此後まこと三途の故郷に帰りて永劫の苦みを受
む事見るふ志のびを昔れ機縁にさげる友に濟度利益をんが爲今
此處に来現せり中告ゆ御辨聖明王れ耳にるるとと忽宿習開發して
信仰の心肝に銘じ感涙袖に餘て庭上にくだり玉の冠を地につを悲愧懺
悔し虛空と礼し給へて玉殿をあらひ佛間と称し如来試
請し奉るべ三尊れ如来微笑の御眸を廻らし空中より紫雲に乘じ
殿中に入移ゆへを異香四方に薫じ光明耀きつりて万億の燈火を一
度ゆるるに吳ゆべ御門を初后宮女諸臣百官渴仰恭敬し奉
て感信の涙ぞ〳〵も鳴をあづまつ〳〵三業の精誠を勵し六時の勤行

怠て〳〵給仕恭敬し給ひりう如来百濟國れ御化導年月をるる
く一千百十二年に成にる其間の帝王九九代とぞ閑え
然るに九代の天子を推明王とぞ申る如来に帝に告ゆ吾この
土れ流生と機縁既に熟しぬるべ今より他方に移る甚所とつぐ是より
東海をさく〳〵一の國土あり大日本國と号に彼國に到く群類を濟
度せべ〳〵と我告ゆ御門を初后妃百官下ゆ下までも閑傳へく御
ワをとるさひ悲しむ事限なし〳〵ども他邦に迁て給うんの告示
現度くなれば千人の僧徒泣〳〵外陣へ紀出し奉まるが餘に
御名殘とゆ〳〵て〳〵〳〵肉陣に入まうんとせしが長老中るに始
如来此國に到ゆ時雲に乘じて来らせ給へば氏度もまこと空をかけ
てく日本に渡てるるゆらに飛行自在の御佛ゆべ何とぞ免なると
も凡夫の力ゆを及ぐ〳〵誓くも留め奉る夏を冥の知見を憚あり
又い佛慮も計てがぐ〳〵只日本に渡し給へとゆをれば〳〵

此議に同じける由門ゆを以て別を歎き無しみまてい(ども)佛乃法
告かれば力及ばず詔を下して日本に送り奉て給ふ御船をそなへ用
意し給ひ金七寶と以て飾て金玉の檀を擁へ錦繡の褥寶蓋と
めぐり千人は傷如来を御輿に遷し奉れば大臣百官供奉
彼女御門左子后妃侍女の由方々玉は簾を挑げ御名殘を
とゝみまひる其外國中は賤男賤女ゆ至る迄巷に立ち依て別
を惜む悲む群四方に響くばかり斯く御船ゆ移らせ給へば水を
掘取櫓擢を取海上ゆ漕出そ行く如来に附奉る日本への勅使
ゆ西部姫氏達率奴利致契思率多利致衍等甚外二人の侍
あり日本に添て渡り給ふ云

純金一丈三尊阿弥陀仏像長一尺五寸同脇士
観世音菩薩得大勢至菩薩像各長一尺同奉副
經論幡蓋臣聞万法中仏法最善也諸道之中仏
道最上也是法難解難入也周公孔子猶不知是

法能生無量福德果報乃至成辨無上菩提遠自
五天竺泊三韓依教奉行天皇陛下宣修行故渡
傳帝國佛之所化我法流東故附使貢献宣信行
者也貢上如右已上

斯く由船を出し給ふ小由門后妃めろくの侍女を具し給ひ日
頃を翠帳の内に居給ひく路頭ゆ出給ひざれども如来の御別を
悲しみの見る目を愧給ひ海乃色に出させ給ひ宣ひ給ふ
我等五障の雲厚くとも三尊の光ゆ照さる奉らむ事今生の
樂く悦びに成後をいで業障の雲霧を拂ひ浄土の月に詠
奉らん姿なれ別を飜し浄土の再會の縁となさしめ給へとて
自ら御衣の裾を採く如来に供養し奉て由船ゆ縋て乗移り
給ふを見へしゞ其俗海中に飛入く大往生とぞ申ひける乳母
大臣百官ども〳〵に宮女あそ驚ぎをれども力なく只忙然と〳〵悶
憧如来に別奉る給へ〳〵みゆ又由后ゆ〳〵別を乗せ〳〵弥妙

国立公文書館
National Archives of Japan

乃雲に迷ひたん我等とも同じ淨土に導すれ給へと称名の聲めろ苦
ふ續いく海に飛入るを理りゆとまと哀なり終く入水の人三百五十
餘人〻ぞ閉〻忽紫雲海上に靉靆来て聖主来迎〻引接〻給ふぞ
有難き異香四方に薫じ音樂響て弥を極樂往生の相を現ぜるる
人閉人も河を及びまで感涙ふ沈みをりけるべ國中れ貴賤日月の光を
失ひ只闇路と惑れ心地して釈尊入滅の昔に異ならぬ斯く術、亦を
波浪を凌ぎ飛ぶ如くに駆ゆ孤島〻浦〻うち過く事故なく大日本
國摂州難波津ふ半夜の鐘と倶に着なが大光明と放ちなへば四方れ
山〻忽金色の光〻ぞ成ふ事なる
抑我　朝ふ生身れ如来来迎あり〻い人皇三十代欽明天皇れ御宇
十三年壬申十月十三日より其比の内裏い大和國山部郡斯帙寫乃金
刺の宮ぞ中奉ふ去れふ百濟国れ官使并に二人の僧如来れ寶輦
と舁く内裏乃庭上に居る推明王の書翰を持ち其よ〻と奏を則

廠閣ふ達〻きれば御門諸臣を召さく百濟國より渡を所の佛像經巻
受納さべきや否を問を給ふ此時一同に奏〻きるい外國より渡を所来
佛像敬く納べきなへば其故を彼國より日本を窺ふ事度〻く
然ども神國の威風ふ恐怖して近傍ふを能はば今此像を渡を事を
日本を呪詛〻調伏きる為なるん遠ふ古返〻あり〻く然るべ〻と奏〻る
きるに蘇我大臣稲目れ宿祢奏〻て曰そを國ふ道有を德なり道を記
い恥なり異國の輩假令昔は日本に野心をち〻ども今を悪意
伏翻〻ぬ〻れ靈像を渡〻佛經を送る条偏に日本れ威徳ふあ〻ば
や吏我朝を神國なり神明の本地を仏と〻て貴敬せば何ぞ〻なく
還さきんに於く〻い小智愚昧れ国なりと侮を吾國を窺ふを必定成
ば〻尤尊信〻べき形像ふ〻くひとなを御門閉召〻蘇我大臣ふ勅
ぞ〻異國れ使者に佛像安置供養の儀式を問〻免給ひぬ天皇ぞ
〻れ由を廠閣ぞ〻〻詔を〻て小墾田乃御殿をあ〻きめ如来を遷

〳〵もひ香花燈明をかゝゞ孫物寶物を供養〳〵奉て禮拜恭敬〳〵
ゆひるかく〳〵異國の使者に引出物を賜て返書をあ〳〵二僧を西免
御暇を給りをれば使者を百濟國ゆ我歸て其後蘇我大臣の宅
に佛所式新ゆ構へ如來を迁〳〵奉て金銀珠玉を莊嚴を盡〳〵七
寶を擅錦の帳花綉幡蓋ゆ至るまで善美を盡せり或時如來乃
眉間より光明を出るら十方を照〳〵もひそれば禁闕の殿舍宮女曹
司局に至るまで輝てをりく實ゆ生身の佛陀なるとば霧鶴不
思議數〳〵ゆく値遇〳〵奉れ輩利益を蒙らざるを於く御代を
穩ゆ〳〵十九年れ春秋を送て迫る然れゆ庚寅に當る今年
如何なるゆゑ哉在〳〵所〳〵に疫癘流行して貴賤男女親よりを子をち
き失て是をなゝみ其外牛馬六畜れ隣なく市中山野ゆいろて歎の
聲止時なく依く御門宸襟を悩〳〵もひ群臣眉代顰もるなり如を
内裏ゆは大臣公卿其外諸官を召さを天下安全るゝ〳〵むべき評議

とゞ関〳〵召る其時物部遠許志大連蓋国中さを乞るゆ倩氏疫雜
を攻へゆ異國より不思議の仏像を渡〳〵をる然御崇敬ある故をゝんら
ゆる異るる像を本朝に渡を事其例なれ所なり依く我朝乃天神地
祇吳國の人形を出崇く神祇の威を失ひをゆを怒て陰陽れ気順環
乃ば病病乃悪氣と変ど國民を悩まれ条明なり夫吾朝を伊
弉諾伊弉冊の尊より一氏も異姓を混ぜ皆〳〵正〳〵れ苗裔なり
然るに異國れ人形を借養〳〵尊重〳〵給ゞ我邦の神祇乃崇を
國土の人民ゆ到るを毋く吳人の形像と捨く崇ゞべき神祇を敬れ〳〵
給ゞ〳〵と憚なく申されをば結鄉一同此議ゆ同ゞ蓋国中さを
をれを御門も此よう〳〵関白く中に所実ゆ為うと伝ゞもべ評議既
ゆ究まりて勿解なくも生身れ如來を失ひをるべき中ゞ成ゆける彩有
〳〵ゞに遠許志大臣下知〳〵て河内枚津より鑄物師数多召集め猛
火盛に吹立て勿許なくも如來と取て其中へ投入をり七日七夜吹ゝを

春江補畫

厩戸皇子
守屋連小
襲ましたまふ時
椋の夷樹その
危急と援を
奉りしころ

ども如来の御身い色も変ずず御もそなわるべ見閑の輩古い者を
命ひと身は毛と立合を巻て我恐ると大臣も今い興さえ穴怖ろ〜
只〜水底ゑ捨ようとて難波の堀江ゑぞ捨ま新其後世間にちまく〜の希
有多ろう紀翌年辛卯の初夏ゑ欽明天皇崩御まり〜遠許志大臣
も疾病は床に薨ぐ多ひぬむ〜稲度波羅門を悪言を以く皆時佛を
謗ま〜咎ゑよう〜く無間地獄ゑ墮ま〜ろう假令綿ゑ摸ま木に刻むも仏神
なり〜べ崇むべ〜ゆ我義る扱敏達天皇御即位乃後御不豫ろり上下万
民怪〜み歎ぐといふるれ〜博士を召く考へさせゆふに奏〜て曰御
悩の事前帝は御代ゑ燒失ひ多へ弘佛像の祟りるまと中に御門
を初奉ま諸卿大ゑ驚給ひゆぐて勅使と難波堀江ゑ流ろ〜給ひ
さるぐ〜は懺悔を礼〜申さる其時如来水面ゑ現ぐ光明耀きれ
い急ぐ此ゑ〜奏聞〜〜ゆぐて内裏に結ぐ〜入ちぬぐ〜の供養をな
〜給ふる首ゑを過ろ〜ゆ〜て御悩を平ふる〜せ給へ貴御悦

びの色とる〜萬〜歳を祝〜くる爰ゑ又弓削大連守屋大臣
遠許志の大臣の子ろう倩思常を運し系内の折ろ〜奏〜るい先帝の御代に
も此人形と礼〜わさび国土衰〜人民病悩まして永く失ひ給ふ所ろ
今又先君は例ゑ宵は給ひ尊崇〜給ふと御不孝ろやさん申朝
は諸神怒をな〜給ふ事必定ろ〜ん失ひ給ふに若くもあらじとせ
帝又此議を信じ給ひ去ろ〜び汝が奏る如く先帝の舊儀ゑ隨ひ
吾朝の神祇を敬ひ奉らんと詔有ろ守屋大に悦び某が為ゆ敵ぜ
ろ〜と〜〜河内紀伊国ろ多は人夫をめ〜寄せ斧鉞を以く打碎ろと
も〜ま大盤は碎け鎚も折て仲躰も損じ給ひ貴殿忙然として
物いふ者なし守屋今い力盡き大息突く假令千日千夜打ども燒ども
損滅せぬ〜只元の如く堀江ゑ沉めて黄金は妙粹併具近水底
沉ま金軸の経巻も彼の上ゑぞ漂ひる又曰假令佛像を失ひ焼る共
附ちりたる僧を安穏い立ま重く併法灯弘もべ〜ゆて一〜捕へ

本田善光難波堀
江を通りし時水
中より光と放ち
けるに驚き走り近
もとせし仏尊
あらく善光を呼
止めゆし三尊佛
いにしへ昔しの機
縁を示しゝ
夫より生国信濃へ
供奉しまつり
則長光寺本尊一
光三尊仏是なり

国立公文書館
National Archives of Japan

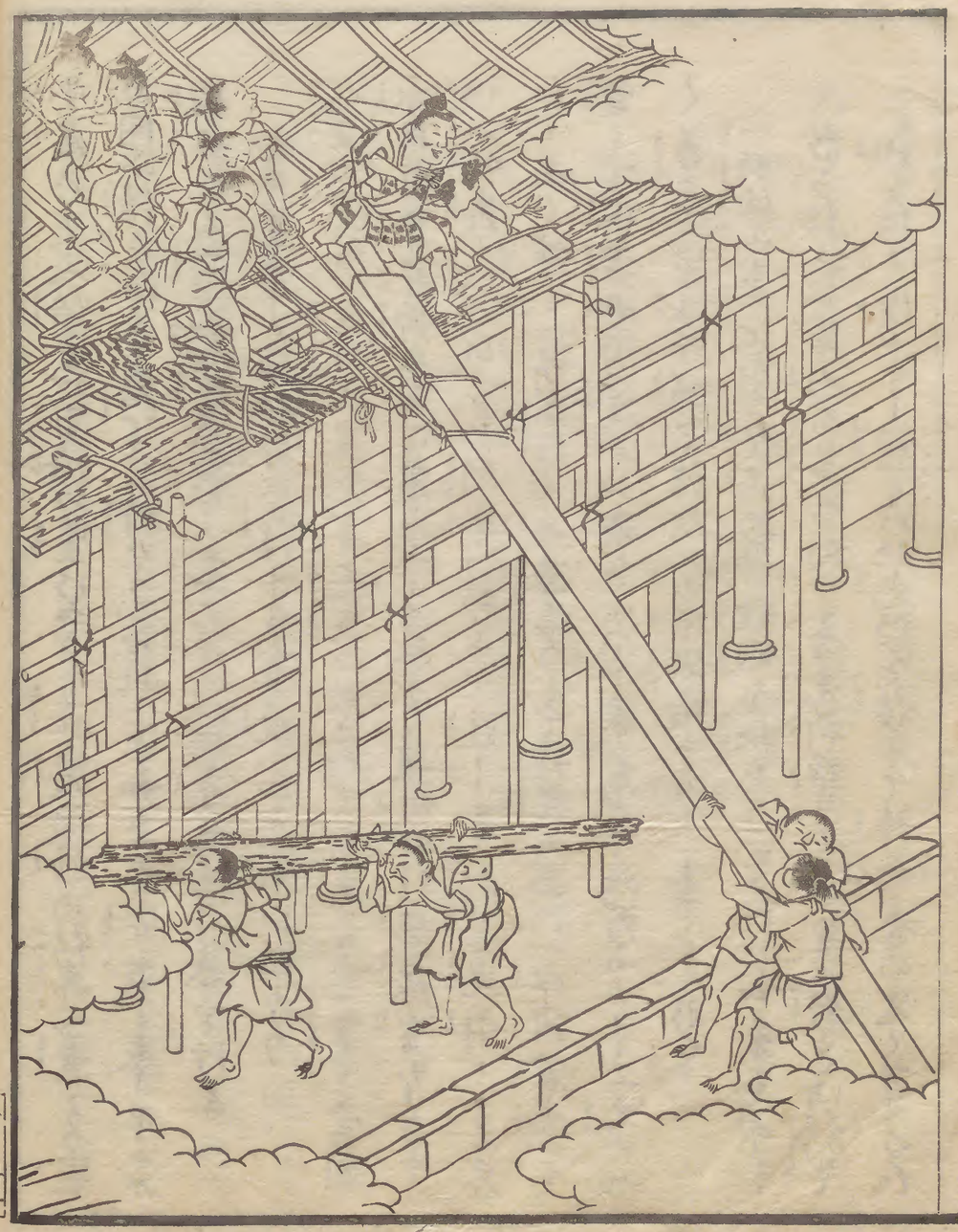
て法服を剥ぎ牢に押籠禁ゑるかゝく丙午八月小ゝろゝく敏達
天皇崩御ゆゝしくて帝弟御位を継せ給ひ用明天皇と申す御后ハ
穴太部皇女ゝぞ申る然るに御后或夜の古夢に氣高き僧古枕上に
イゝく后の胎内をゆり弟ゝせん后の古答に自ゞ胎内に甚く穢れるものを
仰き捨べ給の曰吾に救世の願あり我を古を西方ようと宮ゝ拝と偽
后れ御口に飛入給ゝと古覚て懐妊ゆゝしくする聖徳太子是
那至
胎内に十二月在を厩戸の王子上宮皇子八耳の皇子等古名あり推古帝二十八年二月
五日薨ぜ壽四十九河州科長の陵り葬る今上の太子と
拔る小厩戸れ皇子ハ御降誕ありて後も不測の奇瑞さゑゝなる中に
も幼ゝて異國の經論ゆを流通ー給ひあるひら守屋の大連と交戦の
折柄も掠の霊木に隠ろひて其危難を遁を給ふ事など殊怪ーきに
似ゝりといへども爰に譬とるふ神代の首大己貴命諸神の猜ふあひ
給ひー時嵐生ゝく内を洞ゝく外い宮ゝとて已ゞ穴ゐ隠ー奉るーに
よりて焼野の危急を御ゞ給ひー例ゆも比もべきんや終ふいる屋

を誅戮ー給ひ羅波堀江ふ如来と古言葉をかりー其佛教を受用
ーー給ひーより永く本朝に其道弘まり君臣上下信用勢ぶとゝ
事なく衆生化益れ寺式立給ふ事い大なる古勲功ゆゝにや是
併ゆゝ　皇大神乃御ゑふ應ドなるいぞんば事ゆ　神國ふ跡
と垂給りんや爰をゆゝく古ゆ式ゆゝべ神祇を尊崇ゆるに次て
尤恭敬ー奉るべき霊像ゝぞ作ゞを寺れ
人皇三十四代推古天皇十年壬卯に當る四月上旬れ頃信濃國本田
善光といふ者都の勢事終り此序ゆて名所舊蹟を見巡るーゞ
道れ便ふ法ゆて羅波堀江にゆかゆけるゞ何ゆ古ゝば水中ゆ東
光さゝて見えゝれべあゝきゝうゝぞやと走り過むとする後より
勢ありくゆゆ善光怖ゝ事なるを我ゆを生生世世汝ふ機
縁あゝて安置をゝゆゝ阿弥陀佛ゆり汝静ふきけ首の因縁
を示さん我汝を待る年久ゝゆ宮ふ御参弥勝ふ吳香薫ド

々もべ善光たちまち伝作の宿縁開發して不審をぐし申るへ
き〻ハ其過去れありさを〻と示し給へとれり則告に曰
昔在天竺名月蓋　奉請如来致恭敬
次在百濟名聖明　我飛彼國被安置
今在日本名善光　三國一旗同檀那
我今尋汝来此處　早仕宿縁既敬我
生〻世〻護念汝　如影隨形不暫離
故我隨汝往東国　欲令利益悪衆生

如来重て宣く我汝を待ん為庭の水屑と倶ふ年月をふりこ
九十六年の間なり　時既ふ至てそう汝我を具して本國ふ下るべし汝と一所に生
く荒生と利益をべしと仏勅実ふあらさへ善光隨喜の涙よく
をく思ふ此如来霊昊天下にくをれ殊ふ上宮太子は婦敬も
あをべして王命を窺ひ〻く後悦び勇み如来を負奉て吾本国ふぞ
下々る倩万法一如の道理を按に遠へ則日本伝州の樓茅屋土生乃

小屋乃土人悟をべ百濟の塹ぢるぐう荘厳微妙の仏界へ素より家
の内小清き物とそへ臣ようり外なるをべ此上ふ如来を安置奉てそう
親子三人偶ふ朝夕恭敬しをぐうれ供養をす奉をけるふ
如来當國わく伊那郡に住しるふ年既ふ四十一年れ間なり
人皇三十六代皇極天皇元年壬寅ふあるんて如来告く宣く當國
水内郡芋井郷ふ我と遷をべ〻是より後彼所に機縁有なりや
世示現度くに及べ〻則水内郡ふぞ遷し〻奉て善光前くよう思
ひ〻如く仏と一所ふ住んるを恐あるうて住居の西に一宇れ草堂を
営うて本善堂と号〻如来をうう〻奉をぐも此所わくも又元の如
く善光ぐ家ふぞ帰て結ひる不思議なり〻事ぐも哉と
一時油ふ事とかをて仏前の燈明を挑ぐうをれば如来光明を
放ち給へに家内白昼の如〻善光祈誓中るいふ願をを利生
利を以く演ぐ〻願くハ此光明を移して燈明香の火とをるへ



和漢三才圖會

欽明天皇十三年本尊如來自百濟渡來而未信推古天皇元年草創建寺於伊奈郡麻績里宇沼村

末代ノ信人ナリシ利益衆生の結縁誠に功徳計アラズ〳〵とて
光明即佛の頂に〳〵シテ又眉間より光を放給ふ香しき油
ふるり照させ給ふぞ不測なる如来偈を唱へ給ふ
一度見常燈　永離三惡道
何況挑香油　決定生極樂
是即如来の心光みて三有の衆生乃迷闇を照し給ふ法也
とのべ給ふ文なりけるとべ如来賓前の燈明も眉間の白毫より
出し光明すして数百歳を経ども更ふ消る事なく今猶佛家
に如来を給ふとも火是なり
其後如来御堂建立の事を佛門の法願として紫然御造營なり
抑材木と輪に至りてさるべく神不思議なり諸天善神新向すべく
雖ども〳〵材木自ら踊て歩むが如く彼霊場少なく集り来れ
金堂を造るにも弥勒菩薩匠と現じて是を造て給ひ修造支給ふ

て後忽彌勒菩薩と成て是を天に昇らせ給ひける彼菩提造營の間まで
給ふる所に一向をまつらひ今に世ふ至る迄弥勒の間と申る今此
善光寺は日本の邊地みて凡夫薄地乃草創なれども菩提の法
に〳〵建給へば魔障あるとて却て守護神と成れば事故なく成就
せ〳〵霊場なるべ何人なりとを作げんや父が諱の字をとりて善光
寺と称号〳〵る如来を供養〳〵奉る檀那畧系

△若麻續東人善光（二代 供奉三十年）
信州水内郡本多ノ人
本多武信誉田

若麻續ノ善佐作留（七代）
若麻續ノ高倚

廣道（十代）
利成（十二代）
寛膳部（十三代）
爲重（二代）　称丈部
高雄（十四代）
正常（十五代）
時國（十六代）
女子豊範（十七代）　丈部麻司ノ妻

諸身（三代）
東世（九代）
意比（四代）
國依（六代）
大國（八代）
常世（五代）

此皆若麻尓ノ姓ノ正常ノ女子家ヲ続ギ如来像ヲ供奉シテ其子
相続セリ其中二十代ノミ若麻尓氏ノ然共称号丈部ヲ用ヒシ

○長谷ノ豊範 若麻呂正常ノ女 十六代 大部ノ麻呂ノ安平 大部ノ麻呂ノ男 正常ノ外孫ノ

- 十六代 大部ノ安平
  - 二十代 知里
    - 十九代 時海
      - 十八代 時郡
        - 二十三代 知歳
          - 二十三代 知門
            - 二十五代 高節
              - 二十六代 知隆
  - 二十四代 衆延

右檀越交名ハ次第塩尻ニ見ヘタリ氏姓ヲ相續ノ人々如件 縁起同文

和漢三才図会

欽明 天皇十三年本尊如來自百濟國渡來而未信推古天皇十年草創建寺於伊奈郡麻績里宇沼村而後皇極天皇元年依佛勅移水内郡建立本願主名本多善光因以爲寺號慶長二年七月秀吉公以本尊奉入於洛之大佛殿然佛不悅而有奇祟故同八月復奉還

聖德太子爲欽明用明二帝及守屋之徒菩提於清涼殿七晝夜令行念佛三昧而遣小野臣好古於善光寺奉一通書其文曰

名號 七日 稱揚已 以斯爲報廣大恩 仰願本師彌陀尊 助我濟度常護念

八月十五日 勝鬘上

本師善光如來御前

好古乘黑駒馳至以本田善光獻上之善光副硯紙入之戸帳中則有返翰其文曰

一日稱揚無恩留 何況七日大功德

我待衆生心無間 汝能濟度豈不護

待賀禰天恨止告皆人爾何於何都天急加佐留覽

八月十八日 善光

上宮太子御返報

右歌載風雅集曰歎止可告蓋太子與如來往復之書凡三度七言二句或四句八句而其第二次法興元世一年辛巳十二月十五日使者黒木臣九人 其返翰藏法隆寺年壬午八月十三日使者調子九 第三次同二寶庫而勅封緘無嘗見之者神佛靈異之有無也不堪論

按埃嚢抄等小史載之詳焉竊以年號雖有孝德帝大化号中絶後天武帝大寶以來相續故爲之

年號ノ始ハ然則推古帝ノ有ニ法興元世ノ之年号乎所ノ昧聞也且此時文章未備而七言詩肇於大津皇子四十代天武帝皇子又聖德太子薨去ノ推古帝二十九年辛巳二月也所謂支干皆當薨去之後也疑件文章及年月等後人添ニ妄ノ說ノ者乎

鎌倉殿右大將上洛の時天王寺へ參詣ける其時鳥羽の宮別當ゆくゑ知らぬ御對面のうへ幕下ナされなるも殊勝ゲ一期ノ ゆゝぎ一度ひらき善光寺の佛殿ノ二度びらき其うちえびえの定印ゆゝれ〳〵ほゝえに次乃ゝびゝ未近の手ゆゝ〳〵ゆゝ〳〵ひらびて仏前より印相宣ノ給ふゆゝ〳〵伝へて少ゝどもほゝ〳〵ゆゝ地を又ゆゝて少ゝ〳〵ナさゝゝゝ幕下ゝ只人ゝ云ゆゝざゝゝゝ文作らゝゝゝ

欽明天皇ノ御宇より孝德天皇の御代近年数百二年の間ハ宮殿ハ戸帳をかゝげ如来あゝつゝ拜まれ給ひゝゝ然るに白雉五甲寅ノ年に當ゝ如来告させ給ゝゝ宮殿を営ゝ我と納め前に戸帳とたゝ其故いゝゆゝゝなれば不善造悪の輩恣ハ我前ハ寄〳〵臭氣をうけまとゝゝ我是を厭ゝぞゝゝ却て逆罪と成て皆悪趣ハ墮ゝるなり後之人〳〵驚き恐ゝ急ぎ宮殿を造ゝ戸帳を掛秘仏とな〳〵勢給ふ是その始なり

按るに善光寺ノ佛閣度〳〵回禄ハ乃〳〵有爲の相を示ゝ給ふと いへゝ如来の薫徳を以〳〵天ゝ下の衆生志を厲ゝ再建程ゝ成就ゝ其古ゝ舊記ハ見ゝぞ今縁起ハ載る所と見るに高倉院乃御宇治承三年巳亥三月廿四日巳の刻ハあゝゝ悉ゝ炎上なりそのゝち亀山院の御宇文永五年三月十四日夜半に当ゝ九十二年目なり又四十八年ノ後花園院の御宇正和二年三月二十二日酉の刻炎上ゝり其後又八十八年と過後光厳院の御宇應安三年四月三日夜寅の刻炎上又後小松院の御宇應永三十四年丁未三月六日午乃刻東の門より火発て堂塔一宇も不殘焼滅又後土御門院の御宇文明年間も炎上ありかく度〳〵ノ火災ハを一光三尊乃靈験或ゝ忽然〳〵〳〵横山

正月朔日卯の時
如来堂ふく
年賀の
規式
難波の小謡と
うたふて三度
一花ひらくをい天下
泰平なるべしやうろう
代乃なを安全をめてくみたて

乃堂に飛移り或ハ御厨子のうちい猛火文ハ至ル錦帳の内光明赫
燿として恙なく或ハ紫雲ハ棄て金堂ゑ移り給ふと云ふ生身な
佛神なるずして幸ある奇特のあるべきハ作ぐべし信ぜざ
如来百濟国より来朝あつく聖主十三代打續き御崇敬ゆ〻く或
ゑ宮中に安置し給ふ事をのりしるして其歴代

△欽明天皇人皇三十代在位三十二年　△敏達天皇三十一代在位四年　△用明天皇三十二代在位二年
△崇峻天皇三十三代在位五年　△推古天皇三十四代在位三十六年　△舒明天皇三十五代在位十三年
△皇極天皇三十六代在位三年　△孝徳天皇三十七代在位十年　△齊明天皇三十八代在位七年
△天智天皇三十九代在位十年　△天武天皇四十代在位十五年　△持統天皇四十一代在位十年
△文武天皇四十二代在位十年　以上縁起日本書紀天智天皇三年三月以百濟王善光王等以居難波

○光明常燈佐厨司の宝前ハ昼夜不消の燈明として其ゆゑ名光の○後堂ハ
弘法大師四國八十四番の観音釈迦阿弥陀観音勢至等と安置せり
○外陣ハ疊九百畳敷き系詣の貴賤この所ゑて祓拝を毎夜通夜の

人影ハ○向拝の前ハ中左右ゑ賽銭箱三ツ有○外陣ハ定番乃臺あり
其脇の花瓶に松を差そえ親鸞聖人ゆ手生の松とて毎月朔日に
又堂とよりて東西ハ鐘と掲ゆり外ハ見得ぬ物なり常に撞ゆ〻く
開帳の砌ハ用之○戒檀廻りとゆるの有須弥檀乃東脇に入口ゆり階子
ゆく下り内陣の下と三度巡りて元の口へ出る実に闇夜ゆ如し俗間ハ相
傳ハ放辟邪侈なる人ゆ此所ゆく去と為り又怪異ありと云ふ事詳
○御年宮本堂の後ゑ此宮ハ昔八幡ゆ社なりしゆ今ハ横沢町に遷して其の跡ゑ
毎年極月二の申ゆ夜丑の刻規式ゑ○鐘楼本堂乃東ハ有○昆沙門堂本堂ゑ東二丁ゆ
多ハ○経藏本堂の西ハ有高サ四丈六寸横六間三尺二分四方なり
○御供所本堂の艮ハ有○蓮花松如来ハ来迎の本ゑ○十六善神　巳五九月十五日大般若其外
祈禱ハ節ハ戸ひらく
○秋葉宮経藏の西に有○辨才天祠ハ北ハ別當所の此ハ○山王塚諸神塚本堂前左右ゆ立石是なり○萬善堂
別當所の東向の道切ゑ○忠信次信の五輪二ツ並び立三門の内西例ハ有古代の姿ハ文字も斑ハ有ゆ〻

○鎖燈籠石牝龍の支相馬弾正少弼室石川播磨守平岡美濃守室等と
始めて諸國より奉納する所なり 三門(上の日は正月十五日十六日二季は彼岸三月十五日四月八日七月十四日十五日十六日十月十五日)
以上山門の内なり
○三門高サ六丈六尺七分桁行十一間一尺三寸梁間四間二尺四寸文珠四天王を
安置す是より二王門まで誌に○大勧進 西側にあり 別當所なり東敵山
比叡山より任職なり ○手水鉢 三門外別當所の門前にあり ○天王宮 別當所の例祭
六月十三日十四日祇園會なり山車渡り夜を芝居狂言あり其外古雅な
る祠り物數多ありて賑ひ繁しく諸國より来詣多し是を善光寺の
ごとく祭禮といふなり ○六地藏 ○大佛 山門下東側にあり ○釋迦堂 世尊院にあり 本尊涅
槃の釈迦如来なり天延年中越後國古多濱より出現の像なり
○駒返り橋 ○寛慶寺 山門のもの寺なり慈覺大師の建立なり浄土宗な
時の鐘あり ○定念佛堂 宝林院にある轟堂なり此寺に東都新吉原の遊女
高雄が石碑あり十三年目毎に田向あり
○地藏菩薩 今仏なり西側にあり ○阿闍梨池 円西本覚院にあり 昔皇圓阿闍梨蛇身と
昔の本堂此處なり

成る此池に住るなり詳なる傳をいまだ聞ず
按ずに遠州橋が池いむら比叡山肥後の阿闍梨源皇といふる智識も三塔
無雙の學者なり法然上人の師なり此頃は字を源空と名乗るに
源皇法師なる案ずるに仏道の淵底我一世の修行ゆくゆく悟る事なるべし弥
勒の出世を俟く三會に曉を期すべしとそれまで命を保つ龍身
ゆゑ此池に住て才子等を諸國に下し龍の棲所を見せしむ東
國の使者帰て来りて中せり遠江國笠原莊に櫻が池といふあり南も
蒼海洋として北に青山峩々たり其間に池水を湛へ渕底測て
なし回漣澄みて龍蛇乃棲ぶ霊池なりと中に阿闍梨是を聞く
一夜座禪して一滴の水を掌に中に掬び雨風を起し雲に乗り櫻が
池に到て入定し結ひ給ひ波濤をさかまき雷電
霹靂して村邑動揺す其後源空上人此國に赴き此池頭に係る師
第に別を嘆き恩謝の為弥陀経を誦し祈名念佛し給へば浅猿に
大龍の形を変じ池上に頭を揚て落涙の体なり源空上人もまた涙
を流し師第に情意あるべき本の人形ゆくゆくえさせ給へとありしかば
龍身変じて源皇阿闍梨成る事に越方行末の出物語まして

御血脉頂戴の圖

血脉を
いただく
ふの姿
さま
極楽へ
ゆく

心地よ
さま
文屋好孝

国立公文書館
National Archives of Japan

まこと溝の下に入るゝ人ぐゝ
なりて此池に住るとゝも掬ぶ池乃類ひ多くゝ

○諏訪明神社 麦石の東にあり 祭礼九月十四日 ○熊野権現社 旧西にあり祭日九月十五日 此両社は一山の守護神なり 神庄藤藤下絵守 ○飯縄社 一山の火防の神なり ○閻魔堂 奪衣婆小野道風作閻王は先年焼失す

○御霊屋 大本願の北にあり 御具屋及び法年宮は宦府より代御普請なりやゝ

○摂待所 旧所に あり 是より上壹町斗左右小店連て数珠屋町や云東都

淺草雷神門の内なる小間物店の如く如来御影の掛物并に教珠なども

多く高し ○二王門 高サ三丈九尺二寸桁行六間四尺六寸 梁間四間一尺二寸南に二王あり 北に三寶荒神三面大

黒天 ○大本願 紫衣の住職は堂上方の姫君なり 善光寺上人と称

す日本三上人の其一なり 日本三上人とは善光寺上人尾州熱田誓願寺上人伊勢宇治慶光院上人

○社家齋藤氏の宅 旧南に至る 下絵守と号 ○法然上人舊跡 正信坊にあり上人如来の系譜乃

○親鸞聖人舊跡 堂照坊にあり笹字の名号 并に肉付の御歯あり 寺傳に曰 兼元の法聖人越後

國府へ遠流なるゝ建暦元年の春勅許なり其後常陸國へ御通り乃

節當山の御佛詣堂照坊に御逗留の間戸隠へ御系譜の写

帰り風越といふ所に暫く御休の時御手歴の路傍の岩等を

撰らひ文字の形をなし給ひ即其夜堂照坊なる笹字の

名號を授與し給ふ風越の名号なり 建暦元庚未年三月 上旬法然留氏附堂照

坊茅二十一世阿大蓮 教智比丘の代なり

聖人横曽根正信坊鹿島順信坊を召連られ

当山如来の御系譜此時花袋を差上給ふ今にいたるまで親

鸞松といひ傳へ 本堂正面の太鼓檀にあり 毎月朔日に掛替る 聖人肉附の御歯一ッ堂照坊に

七十四歳の御時なる便御詠歌一首なり

いのちはかゝ髪に霜の一筋落ちぬ身のみてらを南無阿弥陀仏

まこと元仁二乙酉年四月十五日御止宿あり 堂照坊茅二十四世空阿大徳 子童比丘の附代なり

○聖徳太子鏡は御影 浄願坊にあり十六歳 法自作の本像なり ○二天門 先年焼失して復の残まり 東の方

制札あり 松代侯建 西の方番所あり系譜の諸人坊へ着く者は此所より

案内なる本堂より此礎まで長四丁中三間余の敷石碁盤の面乃

如〳〵是い勢州白子れ大竹屋何某一寄進とく是より南へ大門町後丁
新田町石堂丁など北國街道の順路なり商家軒を継ぐく旅舎多〳〵
名産牛皮餅銅細工の店多く其外菓肴飲食器財等富有み〳〵る
自由なるもの〳〵支那く男女の風俗及び言語迫も東都の意氣あり
て繁昌れ佛都と〳〵へ〳〵○善光寺に四門四号と〳〵まうけり曰

東　光明遍照門　定額山　善光寺
南　十方世界門　南命山　無量壽寺
西　念佛衆生門　不捨山　淨土寺
北　攝取不捨門　比空山　雲上寺

○善光寺御花山とて二ケ所あり所謂朝日山本堂より申の方朝日右近と〳〵
○大嶺山　本堂より寅の方ふたつ大岩大内義〳〵人の居塚なり〳〵　宜家より氏寄附
なりむ〳〵〳〵人善光寺を支配せり此栗田氏の末裔い紀州君ふ奉仕〳〵八即左傳門と〳〵
字を見前「昆沙門堂此所ふあり　乃大勧進の別荘と営む　近き頃垣外中脇の空堀を埋め茶亭を営〳〵

○栗田刑部城跡本堂より北に〳〵く二丁東方栗田村ふある平地
○横山信濃城趾本堂より北に〳〵く二丁東方岡山なり今に本塚と

四宜樓と称して眺望絶景ふ〳〵て月雪花の折〳〵騒人墨客に宴を催し詩歌
賦〳〵歌を詠ぶ四時壮観と異ふ〳〵先哲あり〳〵風致なるべ〳〵額ふ文あり

四宜樓説

仁科索元

大凡四時之風物。山水之佳観備諸一處者。蓋尠矣。獨於斯樓也。偃蹇營表。而無比鄰。飛檐郭如。空翠清挾桭。百花拂砌。春秋納其芳。夏則涼。冬則温。面臨二水。堪洗涤心。背安梵王。以擁三寶。朝可披浤雲迎慧日。夕可出色相送眞月。衆禄爲之散。群禎為之聚。實維佛都之鎮也。地則爽塏。而四垂坦坦。遠之連山環匝。林壑杳窱。其間則田園萬井。村落碁敷。隘然眼底。望不可極。況復若風色時革。物象忽換。非可勝説也。然而要之。春宜彩霞。夏宜新緑。秋宜紅葉。冬宜晴雪。此則所以名樓也。若夫藝苑之士。登於斯也。或淬筆鋒於墨池。或樹赤幟於詞壇。蓋弘斯文也。優遊之容。會於斯也。或舉瑛觴以歌月。或舞嬋媛而醉花。蓋暢其情也。雖則志異

善光寺
宿驛
繁花
茶店
の図
支度所
月参
即清膏

春江補畫
御休所
永

爲別。其樂一也。是故雅信日到。而興無盡動則感
来神往。榮辱皆謖。噫微先哲之誠。誰能憶峠銘曰。
崛然高樓。既高且祁。保以佳景。援以四時。
節物一倡。萬客来熙。幽賞搖情。燕興從思。
寵峠其主。永昌眹茲。山水貢壽。梵王領褫。

○善光寺三寺中にて四十六坊あり其内衆徒二十一坊へ宝林院 藥王院 吉祥院 福生院 光明院 蓮花院 常德院 教授院 最勝院 常智院 德壽院 尊勝院 本覺院 玉照院 世尊院 長養院 常住院 宝勝院 威德院 良性院 四乗院

以上清僧なり又中衆十五坊といへ堂照坊 堂明坊 行連坊 正智坊 向佛坊 白蓮坊 鏡善坊 淨願坊 野村坊 兄部坊 正信坊 淵之坊 常田坊 德行坊 隨行坊 以上妻帶なり又妻戸十坊へ甚妙坊 正定坊 壽量坊 常行坊 遍照坊 称名坊 林泉坊 蓮池坊 玄證坊 善行坊 以上清僧之此十坊昔へ時宗に妻帶なり

今へ天台ゆゑ清僧と成る黒衣小五条を着に規式ゆゑ嵐色に猿衣なり

○寺領 千石余の事小割内 百石別當大勧進 五十石大本願 浄土宗

百六十八石衆徒二十一院 七十五石中衆十五坊 三十一石妻戸十坊

百二十石佛供免大勧進持 百二石燈明免同上 三十六石大工免大本願上人持なり

三百石造營免内 百五十石大勧進持 百五十石大本願持 以上

○本堂詰番昼夜八人宛内。衆徒四人。中衆三人。妻戸十人なり此所ゆゑ

如来御新の寫し御宮文不淨除の守并に火打石等を授く

或老僧の曰むかし兵乱の以後法も甲州の属國と成しゆへ武田家より如来

を甲斐へ移さる甲府没落の後大閤秀吉公京郊へ移し大佛の腹籠

なれし後其後 官家より先規に通ず還堂なしゆへ人びとより靈

威弥增り光耀四方に著く近里遠境の老若男女貴賤賤となく

嶮岨と厭ふに寒暑を凌ぎ歩と運ぶとも靈佛の威德なるべし

又或のいにしへ昔如来伝法の伊京郊に座して時善光の夢ゆゑ我を當國

水内郡に移さべし告度ゆゑ乃ちいにしへ素より善光身貧し

自力に叶ひがたきゆゑ国上乃諏訪武井に社人下の諏訪春の宮

の社人曰く秋の宮に社人坊 此三人の堂照坊也明 其外北野喜嶋宮本平手和存

関根七澤穂谷金沢柄沢等に社家十五人 今の中元 十五人なりをやしなひ今に地ゆゑ移し

守護なしゆへ今と如来御年越の規式ゆゑ麻の淨衣を著に是を神衣

○如来の御年男ゆゑ中衆ゆゑ勤む但し堂照坊堂明坊ゆゑ此役を除き十三人

年番ゆゑ一人づつ御年男 堂童 を勤む例年十二月二の申に日丑年越し

其夜并に除夜より正月十五日迄白麻の浄衣袴にて[illegible]川辺烏帽子[illegible]山級
ふ當る人を一ヶ年潔斎[illegible]湯福妻科武井[illegible]三社へ日参れ三社へ日参
級縄山戸隠山へ月参なり○聖年れ古年男へ今年れ堂童子より
送り物あり大根巻揚根の形を作りて二折ふ入く俗く
○年中行事○正月朔日卯れ刻朝拜とゝ規式あり大勧進の名代を始
め三寺中惣出仕是を密と称して勅盃の式あり口取ふ大根乃塩ゆ菜
け塩漬二折なり古朱より宝る謡ありて大勧進の名代謡ゆ其のゆ日
音なり其文句「花開くれば天下みな春なりとや万代のゆは安今ぞ
目出ゝれ是を三度返して僧ゝ堂中の産配ふ金ゝ善光寺れ古例
ゆ古年男い真丁主の振ゆ各退出の時送り出る
○同七日寅乃刻惣出仕にて開帳（仲夫の月）次ふ後正會別當御印文の加持
あり其後小立願（代ゝ甚左衛門）と通称ゝ足ゆ武田伝右ゆ古兎の由ゆ如来ゝ古（両）
を供ゝ人その古ゆと古年男と甚左衛門と盃事ゆり
○二季の彼岸曼供會（初中後）○三月十五日會式あり○六月祇園會（十三十四両日祭）

ゆり山車（幡蛇）ゝ通（行）ゝ美と安ゆり迄四の条諸人も足と止く拜ゝ（振令大那ゆ）
版を打て大念佛ゆ○七月十四日施餓鬼（納骨堂に於て執行）
○十月五日より十四日迄十夜念佛（黄金の阿弥陀仏一幅開帳十夜仏ゆ古厨子の縁大勧ゆ大本釈陽月預りなり）
同十五日如来正覚忌日ゆゝ舎式あり○十二月朔日より古年男清大
本堂に参詣○同日七五三縄張中衆殘らゞ古年男れ坊ふ集舎ゝて祝
儀ゆり赤飯を惣寺中へ配る○同く七日より十三日まで昼夜別事念
佛施行妻戸ゆりゆゝ勤行是をトウく念佛とゝ（本田若光命日十二月十三日ゆゝり）
○同九日古年男より濁酒の古酒古堂へ献備○同十日松を手れ祝儀ゆ
大門町の俵馬役ゝて百姓十人門餅の松并餅搗れ薪牛王杖等ゆ
古年男の坊へ納る○同廿一日女人禁制ゆゝ古餅搗鏡五飾を取古年
男の内ふ志めと張置除夜ふ至ゝ御堂へ正月八日ふ下る○十二月
二乃申の日夜より入御年宮に於ゝ如来古年越の規式古年男浄衣と若者五の別へ秘支
なるゝ依く其行ひ知ゞゝ但備物を一尺角れ折麦ふ小片本三枚を

入る一枚小併二ツ宛飯白豆柔物〳〵盛て供〳〵四門へ一膳
宛供ふる〳〵今日駒ヶ岳（本堂より一里余良の山）駒引れ宮より神主木馬を持参れ
ば〳〵是をお駒迎と云〳〵今日暮六時限定念仏も時の鐘も停止し内人
拝〳〵式寅の刻小異て勤乃鉦鳴と相図小諸半解に成る〳〵○同二十八日
御堂煤納ち年男奉行両人ゆく〳〵執行帯ち竹小葉と結ひ打〳〵注
連を付る傳ぐ後笠帯と別当所へ賜る○除夜より正月十五日迄古年
男（堂童子）浄衣（神衣）と云〳〵着用御堂小詰切同十六日に退出○除夜子の刻
別当所の名代并に三寺中惣出仕開帳法會あり依て元初より開
帳〳〵御供給〳〵配當あり（初拝乃支八月）○除夜より正月十五日迄御堂其
外の諸鍵〳〵堂童子に預ゆく〳〵諸事一人のたゝひ〳〵○門傍の松
竹ち古年男に門斗ち正月晦日迄其他傍〳〵五二月朔日お駒迎ち〳〵て
木馬を駒ヶ岳へ送ゆく時古年男に門松竹ち駒引れ神前ゆく〳〵焚捨
て祭礼あり堂童子に勤足迄なり

○善光寺に七社七橋七井七清水七塚とゝあり其七社ち（七夫ち）

△武井神社　妻科神社　湯福神祠　美和神社
加茂明神　佐喜明神　木留明神（此内ゝ付て善光寺三社〳〵いへ妻科武井湯福なり）

△七橋ち　花相橋（後町）　織土橋（新町）　中澤橋　瀬本先橋（栗田村小有七橋の境なり）
獨寂乃橋（妻科小有）　鶴ヶ橋（八幡川）　清度橋（武井に宮の東小有）

△七井ち　狐井（勝村）　来魔井（三ツ家村）　無方井（西町に西方寺にあり）　有方井（大門町現金屋の裏小有）
崔目井（後町裏）　花井（桜井ともゝ云釈迦堂前小有）　阿舎利井（木覚院裏に在）

△七清水ち　箱清水（鈴流水村の中に在）　盃清水（岩井堂小在）　濁清水（彩田町小在及佐水大又）
有利割清水　柳清水（美和村小在）　鳴子清水（妻科村小有）　傾城清水（湯屋村小有）

△七塚ち　姫塚（市村在熊谷直実の娘玉在姫往生の所へ法号一乗妙道大姉）　行人塚（栗田村小在）　苅萱塚（往生寺に在法然上人弟子）
席ヶ塚（岩石小流小在大磯の遊女十九才少て剃髪盛長私記巻之三十六小曰又爰に奇特
なる事ありし祐成ヶ妻大磯乃虎いちゞ髪と剃らんとゝくも墨衣
袈裟と着〳〵亡夫祐成ヶ三七日に忌日を迎へく箱根山に別当

妻科村
妻科神社　神名式
祭神　建御名方命
八坂斗女命
貞觀二庚辰年二月
妻科神ニ授従五位下ヲ
同五癸未年授従五位上ヲ
土人妻なゝの宮と云
夫木
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
権僧正五朝

そゝゝときめる旅路いろ衣
妻おれい猶森のけゝ
仲葬狂歌併圖

叢の
[illegible]
[illegible]の
実生
[illegible]
[illegible]

行實坊ニ於て佛事を修し和事の諷誦文を捧く芦毛馬一疋を牽き唱導れ施物等とるゝ此馬い祐成が家期の時虎ヶ雨ゝ乃今日出家を遂伝法國善光寺に赴く于時歳十九案ゝと少者縁素越涙を拭ふるいなし

○時丸塚 美和村小在 柏崎殿の下にて今西裏にあり。兄弟塚 見前三門内西の方に並び是を忠信五輪の古塔ゆく文字も微小皆むしてあて雑し 次信の塚〻〻

○毎朝六ツ時閑帳あり○毎日御血脈頂戴とゝるあり足い前夜旅宿ゆく國所姓名を記し足を後せば宿より別當所へ迎を遣し冥加ゝて小紙一折を上る是ホの〻福 備翌朝恒例の閑帳ホ来て夫より万善堂 別當ホの道場なり の廣庭ホ集り居錫〻呼出しある時路次口を入り手水をとゝひ大勧進の内仏の間ホ相詰る其時方丈出く高座ホゆく系頼戒授與同く講談十念倚く念佛此時方丈特座曲系ホ越り御血脈授らる衆生を行ゝ頂戴して退散るなり

○善光寺今れ伽藍造營の事 元禄十四辛巳年十二月廿五日より戒善院慶雲日本廻國ゆく奉加ゝ故宮普請れ儀江戸表より松代侯古奉行衣 作出日十六未年五月十九日江戸大工方岳弼と云者来て材木積本寄等執斗 但元禄十三庚辰七月廿七日下坪小湯より出火此堂并寺中下〻焼失り慶安庚子年再建ゆく入仏より五十一年ゆる

○御堂地割坪数之事。惣屋根坪数千百五十二坪八ト三重

一 桁行九間三尺一寸 一 梁行十三間七寸二ト

一 桁六間七寸六ト 一 出端三間一尺八寸

一 向拜坪数廿一坪餘 一 桁行三間一尺六分八重

一 脇向拜出端三間一尺八寸六ト此坪数十六ト四重八毛

惣地坪合四百三拾五坪九ト六毛 但一坪ホ付三百八十工の積り

凡合大工十六万三千六百廿六工 同手傳二万四十工 木挽七万三千六百二十工

同手傳二万二百工 右工料合て金二万二千九百七十四両三分六匁余 但大工一人付二匁八ト積 日手伝二匁五ト積 木挽一人付二匁八ト積 日手伝一人ニ付二匁八ト積 惣屋根の工料金七百三十両一分五匁八ト

同年七月二日より大工小屋并に諸役人小屋に今れ本堂西堀外に三間梁九五間
四間梁五十間に出来同八月松代より諸役人お越松代長名代小山田平次郎
普請奉行三人取締二人小奉行四人大工三人同手伝三人足軽小頭二十人風
廻小頭一人同心三人。地大工棟梁四人本挽棟梁一人普請方棟梁四人屋根方棟梁
一人普請方人足奉行三人。找木凡拾五万八千挺余
元禄十七甲申年九月手斧始（十二月宝永と改元）江戸大工棟梁四人ある小屋場合印
㊁上重軒巡り 佐平 作平　㊇柱貫虹梁 五平治 久兵衛　ヤ 上重組物虹梁 吉九郎 佐平
㊈板敷縁下 平右衛門 太郎兵衛　八下重軒巡 九郎右衛門 孫兵衛　㊉法堂小屋組 太兵衛 伊兵衛
✕胴立 平右衛門 太郎兵衛　ヲ下重組物 長三郎 市兵衛　福 天井長押箱棟揚 与惣右衛
寶永三丙戌三月板割初同年十月江戸へ帰る斯く宝永四丁亥の〻〻入
佛より以降風雨水火の禍なく連綿として魏〻る大伽藍を泰山の如く
生身の弥陀如来三身圓満四智究竟の佛徳日〻に新か〻く宝小日域
は霊場なり堂内に掛ふ所の額は数〻ふと見ゆるなかにあはひを

載留る者聡智と得まるに跋踉する者は跋踉
きの化益を乱るく許をうく真信の心を以く渇仰する則い盍感
應するらざる作べし〻信ぜべし〻

○善光寺紀行　人皇百四代後土御門 寛正六年七月上旬　尭恵法師　撰集抄巻之第 三百三十六ノ出

上畧
明る日信濃の道へ入道をうれ中畧
ふ博て信りをうるに引等をする人あり〻く内陣み面拝をり奉く
本尊の瑠璃壇を見ぐ〻れまと申ふ多郡の寺縁後ろ浜おの寺
ろ歓喜のたもみぐせれあくぞ如来本朝渡り給ひ仏往昔ゆく坊
ひたぐきて
てをたるは泊ゆ〻ゆ雖波のあ〻ほよ〻〻有明乃月
暁に乃上すて月ひて法〻うれ信り姨捨山を坊ひ〻〻
彩やてゐ坊ら〻文彩や姨捨山をあ我れ我の月
十五日彷を立ろう土壇の新〻ん〻るぐ〻れ信ぐ〻ぐ〻め 下畧

過善光寺　南亭

傳聞霧像紫磨金。西域飛来利益深。邊兵當年善男女。
依然此地古祇林。旭峰雲靄和鑪氣。丹水波涛帯梵音。
不是群生同渇仰。公程豈許此攀尋。

皇代御代とゝくに我行ふ仏を志るや三世乃佛も　伊勢荒木田　久老

若ひろう寺て月又は今宵この半
月うちや四門四宗を尋ぬ川　宗祇
遠ゝぬ志れ拾ひ樂や和ゝきに　芭蕉
むく起乃こゝ後涼ゝや堂まい栗　支考
又波せは蓮臺ひろれ忘れ飛う那　慈竹
糸ゝ祝いたゝゝぬ國ゆりきくて女　露川
山も眠けきんや半れ軟法ゝ帳　曽木
紅うくたちまを忘露乃ひうり小　盧元
新波ひふわゝと拾ゆゝ佛も今八信法にようゝ乃寺　輝牛
　蜀山人

我國よみのうれ聲をきゝ氏法仏やけ〜矣ゆる説　利忠

○苅萱堂　寂照院往生寺ゝ又　浄土宗智恩院小属ハ　善光寺如来堂より西八丁山手にあり寺内ハ親子地藏并に来迎の松あり東南と曠く見下して風景好き小院なり

此苅萱寂照坊等阿法師ハ人皇七十六代近衛院乃御宇筑前國主加藤左衛門佐重氏同國三笠郡苅萱の莊博多の城ゆ居住なり重氏二十一歳ゝ春花の下に帰らむるを忘ゝ酒宴と催ゝ拍奥の折ゆゝ春乃山風ハ蒼めゆる花一輪落く盃中に浮む重氏法ゝ是を観相ゝて誰ゆ百年を期をんわゝむゝ頻に急常ゝ心發ゝ妻子弥寶を厭離ゝ左府をゆり捨忽然ゝて帝都に起き叡岳ハ登ゆ西塔黒谷ハ叡空上人にまゝん利髪ゝゝ等阿法阿と号ゝ于時仁平二年四月二十四日ゆり爰ハ統前箱寺八幡宮ゝ神宛ハ依ゝ御弟子源出に侍ゝ合佛ゝ行者ゝ成て十三年と往く高野山ハ登ゆ西錫せり然ゝん嫡子石堂九母ゆりゝゝ重氏の行歩を尋ゝ到ゝけゝ

ども恩愛を菩提の障ゑりとして弟子に名乗ゑり〜放永万元の
石堂九刹繁〜て寂照坊の弟子と成て信生坊道念と号し等阿
彌陀仏〜ら〜新子一山に在て愛会捨ぐ〜と正治元年八月中旬
信濃国善光寺に参り今往生寺の境地に草菴をむすび日夜如来
前に端〜会仏の外又餘念もなりて或時通夜の夢に多の法坊
内室桂の前娘千代鶴ゑ〜びに千里の前善光寺如来に六地
蔵と祈ぐ寂照ゑ地蔵の化身ゑり大弘地蔵の像を造立して衆生
を化益あるべ〜と告給ひ〜夢覚め依〜地蔵菩薩を建立して人
皇八十四代順徳院の御宇建保二年八月二十四日享年八十三歳にて
往生ゑり其夜高野山に〜道念法師夢に感じ又寂照乃命終
物ひか〜〜て急ぎ善光寺に到て大法会を修し等阿自作の地蔵ゑ
を拝〜道念も同じ〜かゑり〜に地蔵菩薩を造立〜建保四年七月廿四日生
年六十六にて〜往生せ〜〜荊萱親子地蔵と云是なり

○薬山ぶ〜んど薬師　善光ゑり一里ゑど丑寅の方に山上の岩穴ゑり
扇の如く木ゑ生〜〜そぐ上に堂を建ゑり荒木田の久老考の文あり

薬山乃歌　并序　　久老

伝説の国水内縣に薬山といふ山あり〜に中に山ゑりて切ゑる
如き千尋ばかり巌の中ゑりゐ出ゑる水を流して掛れり〜へ
ひとつ屋と作りゑりその家ゑりゑるの山岸ゑりうち積
だる物をひ〜てゑる通ゑる免ぐりの橋ゑりえ渡ゑりは谷深
く〜て歩ゑ〜ゑ〜ゑる谷川ゑり行き川といふさゑりとゑる
油に此川ゑり流ゑ出ゑり板ゑの家ゑりに〜ゑるき薬師ぞ
ひちれ石像おり〜ゑ久老致ゑりの業ゑとはゑんゑ少彦
名れ神乃みゑるべ〜かく〜ゆえに延喜神名式に能登国に大名
持乃石像の神社少彦名の石像れ神社ゑり又常陸国に荒磯
崎薬師善薩の神社ゑりてゑ〜ゑもの神ゑ〜〜ゑ像なるゑ

藥山
ぶ〜んごの
藥師

長原乃
温泉

山吹の滝

藥山ハ筑ゞ嶽の
山脈ゟり駒形
明神の宮ゝち
ゟ上友名ゝん
中山道の
筑ゞ岳ゟ
ゆ〜ゝ

山吹や
日ゝ
永ゝの
温泉ゝ
ゆはひ
中彦

続日本後紀に見へたりされ神の御像を石にて造るなり
ゆゑに病をはらむ道をくゝ〳〵いたりて薬師の名称ゆゑ
奉るものなるべきをれば薬師とまをすを必との神ふれそ〳〵
ゆゑ事絶ひなるべし〳〵

くゝれ神ゆ長名の造りなん薬の山にまゝきろうを　久老

西の緒乃倉のゝとゝ薬山なる川流をいさむまひてれ　後足

薬山の禁を巡るゝ四丁奥に長原れ温泉あり其下の流を浅川といひ
山吹乃滝ともいゝ西岸に山吹多くある故名にあゝなるべし〳〵春の末夏
はたゞ先に川竜の岩穴に遊ぶどうち裂く酒砌を盃なんど流し〳〵家務を
忘るゝを病を治し命を延る仙境の姿びなるべし〳〵

いはゝくふ大海の日数を流れてもなを清に咲く山吹の花　義徹

湯福神祠　如来堂の西にあり　戸隠街道なり是より登の坂路ゆく下るを
若先寺三社の甚之
なゝ〳〵先八町ばかりく塩沢といふ所に温泉あり人家の側に浴室をうゆへ

火を焚佛を味ひたりゆゝ〳〵夫より七曲てゝ坂路を登る右れ方に清水
の涌出るあり豊清水とゝゝ岩穴と二ツ並上るゝと旅人の用となゝ〳〵下
を牛馬に例ゝゝるゝ登るべ大石とて大なる岩左右にお並に女夫石
風越といゝ所に別に道の石標あり　左戸隠道　右在ゝ乃　此所の福壽庵に風越乃
地蔵あり夫とるゝく荒安村に到る右方の山に飯縄明神の里宮あり傍
に仁科氏なる郷士　秩石　あり郡氏明神の社勢ゆく勤行の服麻上下着ゆて
仏経を誦ゝとゝゝ其家系れあゝはゝと関伝るに頼朝公のゝより千日
大夫といゝ仏人飯縄ゝ無に住ぐ飯縄権現の社司なゝ紀粤に仁科の森
乃城主に仁科尾張守とて武田信玄れ聟なりしゞ永禄四年三月甲
府に徴〳〵故あゝく切腹歩の城廃るいゝゝく男子一人女子一人を家
士等必抱〳〵て此山に逃来り千日大夫を頼む諾〳〵て男子を領ゝ女子
ゝ当山に至く来叫ぐる故越後へ落れ上杉家に召おゝまんるゝ代
葬ゝ議伝是を勞ゝ養育せゝむ　此小女成長の後ゝ者の奥へ嫁ゝゝむ名家の胤なれば
ゝて妻の氏をいく仁科と改め今猶上杉家に仕ゝゝ

湯福神祠祭神諏訪

戸隠街道

塩澤温泉

横沢丁八幡

涌出く芝ゝ満ちる
塩澤乃湯福の
神ゝ実にまし〳〵奇

草庵狂吟伴図

甚後年月を経て千日大夫甲斐守登り信玄乃機嫌を窺ひ罪
なれ小児一人と吾等が許に申しるひ置ぬ仁科の家を立場りて
申と云て伝云いて怨敵乃跡何をう歎う千日大夫嗣子なれば幸
ひ嘗ふとうたゞと輙仁科甚十郎と認免朱印を押て是ゞ仁
科の跡れ譲授ぞと云て賜うぬと云ふう千日をあゝとめゝ仁科と
称を依て古證文数通を納む

朱印九珍

仁科甚十郎

天正六年
正月廿三日

五月廿日信玄

酉

朱印九珍

飯縄山ゝ事
此文豊臣秀吉拘れ時
不可出お遺れ御る
武運長久ゝ祈念
不可疑退物ものも
の此事

弘治三丁巳
三月廿三日
飯縄ゝ
千日

仕別飯縄大明神御社領ゝ事
一弐拾弐貫 上野ゝ内 一弐貫文百 上原ゝ内
一拾貫 小淵ゝ内 一弐貫 小御ゝ内

朱印九珍

飯縄山ゝ事
此文豊臣秀吉拘れ時
不可出お遺れ御る
武運長久ゝ祈念
不可疑退物ものも
の此事

弘治三丁巳
三月廿三日
飯縄ゝ
千日

仕別飯縄大明神御社領ゝ事
一弐拾弐貫 上野ゝ内 一弐貫文百 上原ゝ内
一拾貫 小淵ゝ内 一弐貫 小御ゝ内

十月十六日

朱印九珍

飯縄ゝ
千日

飯縄の里宮
同奥の院
鍋蓋権現
笠山
級の峯
仁科氏の宅
桂山古城

一壱貫　徳之丙　一拾貫　千田之丙

一壱貫弐百　市村丙　已上

彩清寄進

一壱貫三百　入山丙　大文　一七貫　廣瀬丙

一拾壱貫弐百　南仁丙　伊毛井村　玉家梨窪山内

右此件彼寄附年深ニ付清水家伝代運

長久者　作之如件

元亨元庚午年　　朱印　清正忠奉之

九月朔日

千日次郎殿

定

阪縄御神領以先例別紙寄附之上ハ自今

己後永ク正印和遠年先例之通永代伝代運

長久ニ可行者ニ付永昭ニ証所ニ作如件

天正八年　　小松尾清忠

庚午　　千日

十月　　寄進之

定

茂四郎　吉兵衛　九郎兵衛　半兵衛　右衛門

茂八　孫兵衛　清兵衛　清久　孫兵衛　孫三郎

吉郎兵衛　吉六　与三郎　吉左衛門　吉兵衛

阪縄大明神如旧規本山法迎之上ハ遠行

以当右拾七人ニ可普請役仕者ハ永家中

仮造て法華嚴を二の枝動仕る枝
作初まや仮山作

天正八年　三月十日

業部 九枝

此外の古書墨之内の古跡之と以く今を見るにむ〻神領れ紀為
る社頭の莊麗なる半思ひたるはべ
仮縄大明神祭神を天神茅五偶生の御神大戸道尊を齋祭本地八大日
如来み〻て即不動明王変相ふく後ら也給ひ火防隨一の神徳ぶにいち
じるくあるひも衆生濟度の為ょ地藏菩薩と現ト武門擁護乃為ょは
勝軍地藏と現じ給ひその冥感測るべ〻べ（縁起下畧見原氏云 吃祇尾天を祭ると）是より本岳
奥宮に登る（晃安より三重あり）慶男れ導伴ふく家僕ょ神供れ調度ゆ〻び粮服弐

取持て七攀頭蔭面を踏むぐやそん坂を越え入坂を出べ土生れ小屋あり
土の老夫を髪垢服壊く柴の煙覧れ水倶ょ心細くも爰に憩ひ遥ぐく
登るべだ〻おちて〻池（池中に浮島あり）を巡て仮縄原に出る二十丁ばど行て嶮
し〻れ坂あり（約八十丁）岩角を足かゝ〻て根笠ょ把て十五丈丁のぼる此所
ょ千日屋敷とて些〻れ平地あり（千日大夫安長れ地なり）倶利伽羅不動の石像苔
むて腰下を折を失くなり〻その石工の鹿拙なる中古以来の物ょ非
ずその峭壁ょ不動の滝と〻く清潔なる飛泉あり〻〻今を山閣岩屋
てそれ跡を形く但峯峦の溜湫澗溪ょ溢を山腰に七ツれ池と成て
ゆ〻く号あり東より南要筭を所謂みのゞち（大小二ツあり女夫池と）大池丸
池新池おい〻おち一の〻ち等あり是より拾丁余のぼ体嶮岨目を
眩くだろ〻く言葉ょ述ぐ〻〻漸く頂ょ到て条竜舎の茶ょ
く息を續ぎ汗を拭ょれ東南を眺るに富士峯幽遠ゆ〻く和田
嶺あさ〻ちなり浅間山を煙ゆち界て〻く向行ぐそれと彩〻を千曲

川犀川を悠々として龍蛇れ横りる芋〻其外作き見る戀崖
を凄凉と眼下に峙立し又西北に顔を戸隠奥嶽の山脉高妻乙
妻剣の峯巽姫山に続き越後れ赤倉山神戸原山鞍骨山及摺
貝樗明光山北八条等群峯威儀を列ね尖峭や〻て緑雲ゞて
黑く雪まゝ白〻偖また佐渡の嶋山を望れば北海乃涯浪天
を浸して渺〻茫〻
抑この飯縄ゞ岳を既に冷際に至るる時なるに寒風来りて肌を通る
雲霧常に朦朧〻て峯の露〻て稀〻〻〻〻今鳥も幸ひ
一天晴明るれば登山して年来の願望を足ぬこれ併るゞ大山
祇れ神の擁護且る天道れ助なるるんに幸この幸を得ん便神酒を持
燈明を挑け宿孔と敬白に扱嶺の内五丁北東に根笹を分け山
葉根笹生長り結ぶ麦畑のゞ〻季村〻〻毎年里民これを苅拂ひ彩術とす〻〻
雲に作り食に美味〻て作の子れ番まあるしこの行ふ
沼田の畔に如く土和〻うなり小岩拔るる砂糸の根笹ゆる所あり是飯

砂のある所なり上面の砂を撥除〻岩の隙をゆて七ひ出せば麦
飯の如く粟飯れば〻〻採く服もゆ和〻うゆて何の香気なく
風味〻そもなし〻腹ゆ充るとて障ゆ〻〻此砂みどりゆえてちんゆ
さるとゆ〻家去毒ゆせんゆと社司れをゆ社司其侘言を唱へく一拐ゆを授く放ひく祈り一表
水に浸〻並べ又和〻ゆ〻ゆ〻〻ゆ味へちゆふみれく奇異乃みゆひをゆ〻作りぬ
実乾坤の間ゆかる不思議の外ゆをありやいまゞ不関愚想ゆゆむ飯
砂れ名に負ふるを世ゆ書伝ある飯縄乃文字ハ常〻ゞや飯砂ゆ名べ
と仁科氏ゆ語るべ文字の形ゆ尤もありなんや〻〻〻〻言を訥むこの岑
を薬艸多く今小黄蓮の花盛なるまゝ蒲萄の蔓もに繰ひゆまゝひ
て所〻に村山ゆて花の家中ゆり此霊岳三十六の巖窟十八乃谷
あり北裏ゆを雪所〻に石まゝ麦彼ゆよ大岩あり又天狗の遊場
て〻ハ凡二百坪もあるゆ白砂ゆく碁盤の面れば〻〻ゆ清き小池三
ゆり今水毎月の央ゆに至れ氷閉〻顔れ浮〻も又之すゆ霊岳に
遊むゆ遠く千重の浪と分く崑山乃玉を拾ゆゆをあ〻ば遠く

むう〜西行上人この國
遊歴さゝみぎり戸隠ふ
まゐ〜んして級縄原を
通らるゝがこゝの侍れる
児の巌を探れるとゝて
つゝびゆくゝまゐやとせと
たゝふを張ひしゝゝ見
ゑの未ゑふてかゝらやれて
少れんいゝんけるえより
戸隠の日乃御子れ
社頭ふ桜の蕾う
るりるゝ初紅子の
上人を見て此桜ふ
つゝのゝりられど西行
けるらどとゝるうゝ
ゝゝ木よのびる

とロをゝみけりゝきば
たのやうるる法ゆきゝれば
やはぐゝるる上人ゆれの
四ひと形是ゝぐ人な
けゝびゝ登りてら
ゝうゝれんゝて
見ゝうゝ引返
安臺ゝ那佐野の
うゝ人通ゝ荒明山
ゝ方ゝゝうゝゝん
ゝゝゝ

是山乃寳を求るにもあらバ唯戸隠へ来る小僅一里の路りなれバ心
あらむ人の一度ハのぼりて山神の奇特を渇仰し飯砂をも試ミ
神誓十三ヶ条（縁起ニあり）の如く幸福を得んこ何の疑かあらんされバ明
の士人陣生とい人海上暴風に逢て圖らずも蓬莱嶋にいたりしが
寉髪の老僊悃むく一室に饌を其器皿金玉にて蔬菜みな薬の苗
なりといふに齋しく浮世の外と我おもひきりされ

縁起　人皇十六代應神天皇の御宇當山に跡を垂給ひしより五十四代
仁明天皇の御宇までハ登山する人もなかりしが嘉祥元年辰三月
學問行者始て山頂に斗といへ其後久しく星霜を経て天福元年
春三月尊容を鑄摸し寶殿を頂上の西窟に造営しより順路
漸くひらきて士民登山するものを得より天文元亀の頃武田信玄
殊に渇仰し給ひ種々の霊験あらさるより若干の社領を寄附
し莫大の費用を輔て本宮を再建し及び里宮を造営ありし

三ノ四十九

是を前件の古證文と見ても知るべきなり
次くハ此山乃麓に何去といへ村あり按に西行の歌に武士の習ふ
きさみも此びさくしあけ戸ハさうりのをのいまふひ此祠に出る地
名かや　或の云是宗戸の名さハもや戸を宗くはむりしみな宗戸なんにハおく退去を急する義によひよせるべし実戦にえる山をあつて地名ふれバ多く名つけるにやあらん

漢事始　遁甲開山記に曰麗山氏の時山谷聳て分る
天地の始混沌として未分きざる時只是水火の二物のミあり水の滓濁
凝て則地となる譬バ潮来りて砂を湧起がごとくなるべし今高に登
て群山を望むに其形波浪の勢ひのごとくなるにて知るべし其始
究て軟かなり後方に凝得て硬し其滓濁の湧起アてる高き所ハ
山岳と成り窪湾ハ不少なるハ川と成りて大なるハ海と成る其理自ら分
暁かり右にいへる仲起海陸を治め庖犠氏川岳を定む麗山氏山谷
をわかち爾より以へ只海陸を治め川岳の名を定め山谷をわかる
是に始て山海を開きるやいへるにくいふすうはべし

塩尻

朱子曰天地始想只有水火二者水之滓脚便成地今登高望羣山皆為波浪之狀便是水泛如此只不知因甚麼時凝了語類

予そのころ拾州有馬近き大平山小登り行き時友ありて傍に倚を痛し侍てしらげみるとくの勢いたいめるさまなりける勢州安濃郡小や拂寺とて名寺家の仏所なるそこに貝石山とて岩山あり山上れ石の中ふ石貝あり石を砕て出し所持しあり〻く螺の形蛤の形あり裏莫して黒石なり癸巳仲夏或人とりはかりて云ことはりるはもとゞ伝法ゆや少將義行の御代の山ゆも石中に貝あり

と元来実にたちしからのあるるるい始るり某様の貝石と一般の物と蓋古世等も海中ゆ生を有つん朱子乃説を以て視るれ海水漸時に退き軟尼化して硬石し形りて貝界その裏ふ含まれ同く化てなと成しゆや天地のあらゞ思侯もぐ〻ざはる多しー

善光寺道名所圖會卷之三終

国立公文書館
National Archives of Japan